

平成22年度京都市伝統産業活性化推進審議会

日 時：平成22年7月7日（水） 午前10時～正午

場 所：京都ロイヤルホテル&スパ 2階 麗峰の間

出席者（五十音順，敬称略）：

井澤 一清	市民委員
大谷 貴美子	京都府立大学生命環境科学研究科教授
大畑 眞知子	京都市小学校長会副会長，京都市立藤城小学校校長
柿野 欽吾	京都産業大学経済学部教授
河村 和子	京の伝統産業春秋会監事
佐治 壽一	京の伝統産業春秋会会長
島田 昭彦	株式会社クリップ代表取締役社長
高木 壽一	財団法人京都高度技術研究所理事長
滝口 洋子	京都市立芸術大学美術学部准教授
日野 明子	スタジオ木瓜代表
細見 吉郎	京都市副市長
森井 保光	京都市産業観光局長
山舗 恵子	株式会社京都リビング新聞社編集部編集長
湯浅 靖代	市民委員
若林 卯兵衛	京都伝統工芸協議会会長
若林 靖永	京都大学大学院経営管理研究部教授
渡邊 隆夫	西陣織工業組合理事長，京都商工会議所副会頭

1 開会

2 議事

議案1 審議会会長の選出及び副会長の指名について
会長に柿野委員を選出。副会長に高木委員及び若林靖永委員を指名

議案2 部会の設置及び部会委員の指名について
計画検討部会，活性化検討部会及び審査選考部会を設置。各部会の委員を指名

報告事項1 京都市伝統産業活性化推進計画に係る進捗状況等について
平成21年度及び22年度実施の伝統産業活性化に係る新たな取組等について報告

<委員>

- ・ 京都伝統工芸連絡懇話会に所属している産地は、規模は大きくないが魅力のある業種もたくさんあるにもかかわらず、一般的にはあまり知られていないので、もっとPRをしていく必要がある。また、30周年を機に会の懇話会の名称を変更してはどうか。

<委員>

- ・ 四条京町家は入館者数が増加しており、閉館後もNPOが入居して町家を活かした事業を続けているが、閉館理由を詳しく教えてほしい。

<事務局>

- ・ 厳しい財政状況の問題もあるが、閉館後に入居したNPOにより運営され続けているほか、民間運営の類似施設もできており、京都市としては町家を活用した伝統産業のPRや商品開発の拠点について一定の役割は果たしたと考えている。また、伝統産業のPR拠点としては京都伝統産業ふれあい館があるので、引き続き館の機能強化についても検討していきたい。

<委員>

- ・ 四条京町家は家賃が結構高かったのではないかと。どの事業でも同じだが、特に東京のきものアンテナショップ事業をはじめ、費用対効果については検証していく必要がある。

報告事項2 次期京都市伝統産業活性化推進計画（仮称）の策定について

平成23年度中に策定予定の次期計画の策定準備を開始することを報告

3 意見交換

<委員>

- ・ 伝統産業を活性化するに当たって、他の産業と融合することによって新たな分野での需要開拓が見込めるのではないかと。実際は違うのかもしれないが、市民の目から見ると既存の伝統産業の分野だけで活動しているように感じる。

<委員>

- ・ 京都の伝統産業製品については、「良い物であることは知っているが、価格やメンテナンス等の面で敷居が高い。」と感じている人が多く、特に若い世代はその割合が高い。学生向けの事業も色々やっていると思うが、母親世代以上の人に対して、京都の伝統産業をしっかりと理解してもらうような取組も必要である。

<委員>

- ・ 京都市の小学生は意外と伝統産業に触れる機会が多い。総合的な学習の時間に「地育」や「食」をテーマとして、地域の伝統産業の職人さんや料理人さん等を招いた学習を行っている。また、保護者もPTA等において伝統産業について学習する機会があるが、需要の開拓に直接結びつくものではない。
- ・ 学習を通じて、「将来は職人になりたい」という子どももいる。伝統産業に対する興味を中学生以降も持ち続けさせるような取組があれば良い。

<委員>

- ・ 最近海外、特にシンガポール、中国、インドネシアからきものを着たモデルが登場するような「和」のイベントを実施してほしいという依頼がある。これらの国々では富裕層ほどではないが、かなりの所得がある「新中間層」といわれる人たちが増加しており、大きなマーケットになると実感している。外国の方を招いて京都の和装を体験してもらおうイベント等を行えば、新たな販路開拓につながる可能性を感じている。

<委員>

- ・ 食育に関する活動に携わっているが、学習の場で「本物」を体験させることが重要である。市内のある中学校で旅館で京料理を食べる取組等を行っているが、市全体、あるいは京都に来た修学旅行生にもそういったプログラムを提供していけば良い。また、学校給食においてもメラニン樹脂の食器を使うのではなく漆器を使うなど、まずは京都自らが地元の文化に理解を深め、誇りを持つことができるような教育が必要である。

<委員>

- ・ 役所は年度主義なので年度末までに事業をやってしまわなければならないが、ものづくりには時間がかかる。手続きに時間がかかるのは理解しているが、事業の始期をできるだけ早めるなどしてほしい。
- ・ 発表会等の事業が終わった後も事業者のモチベーションを高く保ち続けられるような対策も必要ではないか。
- ・ 京都の事業者は、行政が様々な販路開拓事業を実施しても「京都市の活動に協力してあげている。」という意識が強いように感じる。もっと主体的にやってもらえば良い。

<委員>

- ・ 市立芸大には「京都」に憧れを持って入学してくる京都市外からの学生が多いが、京都は色々な面において「敷居が高い。」というイメージがあり、京都の企業に就職できるまでの人は少ないので、大学のカリキュラムにおいて地元の文化や産業に触れる機会を作っていきたい。
- ・ 京都の伝統産業の技術力は非常に高いが、デザイン力が弱い。技術に頼りすぎではないかと思う。
- ・ 京都市も色々な取組を行っているが、個々の取組同士の連携が不十分に思う。伝統産業に対する取組全体を見て個々の取組に整合性があるか見直す必要がある。

<委員>

- ・ 東京ガールズコレクションへのきもの出展のように子どもと大人の間の世代に対する取組が必要。40代や50代になってから急に立派な訪問着や袖を着る人はあまりいない。もう少し若いうちからきものをファッションの一つとして捉える意識を植え付けていけたら良い。
- ・ ブライダル業界も、きものを着る「和婚」がブームになっている。当社でも「和婚」をテーマに、京都のきもの等の特集した雑誌を最近刊行したが、若い世代の消費者をターゲットにしたPRすることが大切である。

<委員>

- ・ 多くの団体が様々な事業を実施しているが、それらの情報が世間に十分に伝わっていない。例えば今年の全国大会においても素晴らしい展示があるのに、1万人しか来場者がいなかった。また、マンガミュージアムの火の鳥も設置されたことは知っていても、それが仏師の手によって作られたことは知られていない。行政にはPR活動の充実を是非ともお願いしたい。

<委員>

- ・ 春秋会を活性化させるため、技術功労者の認定を現行の60歳から55歳に引き下げは検討できないか。
- ・ 本年度、工程別調査を実施するが、京人形の場合、京人形商工業協同組合の「商（販売）」の方は大丈夫だが、「工（製作）」の方は今後後継者不足が懸念されるので調査をお願いしたい。

<委員>

- ・ 現代では生活が簡素化され、人々が便利な方へ流れてしまう。私はきものを毎日来ているが、結構不便なものではある。利便性に対する反省やノスタルジックな思いが一時的な現象として起きているが、伝統産業の振興にはつながっていない。
- ・ きものは流通コストが高すぎる。職人に十分な報酬が支払われていない現状では、産地は細っていく一方であり、この問題が解決されないと産地振興はできないのではないか。

<委員>

- ・ 西陣意匠紋紙工業協同組合では、修学旅行生や企業の新人研修等のために見学体験事業を実施しており、最近ではベテランだけではなく中堅の職人も指導を行っている。どの業種でも中堅の職人は少ないと思うので、今年度から実施する「未来の名匠」認定制度は、中堅職人のモチベーションを高める非常の良い励みになる。

<委員>

- ・ 進捗状況の報告にもあるとおり、マイクロベースでの細かい取組をしているが、マクロベースで見ると売上は下がり続けている。次期計画の策定に当たっては、市場の開拓を進めていく取組について一番に考えていく必要がある。

<委員>

- ・ 伝統「産業」というからには、それに携わっている人たちが儲かるような事業をしていかなければ、事業として失敗であったということである。
- ・ 例えば、財団法人京都高度技術研究所ではきものアンテナショップ事業を京都市から受託して実施しているが、四半期ごとの実績を見て必要な見直しなどを行い、事業として成功するように頑張っていきたい。

<委員>

- ・ 40年～50年前の西陣は非常に活気があり、町中に機音が鳴り響いていた。現在は非常に厳しい状況ではあるが、個々の事業者が活力を持ち、後継者が育っていくように伝統産業活性化の取組を進めていかなければならない。

4 細見副市長挨拶

5 閉会